

登園場面における登園方法と保育者意識の関連性の検討

山崎摂史^{*1}・金子亜美^{*2}・水野政夫^{*3}・中山晴美^{*4}

*1 東京福祉大学 社会福祉学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

*2 日本こども福祉専門学校

〒950-0086 新潟県新潟市中央区花園1-4-8

*3 江東区小名木川保育園

〒136-0073 東京都江東区北砂1-3-30

*4 南千住第三幼稚園

〒116-0003 東京都荒川区南千住1-13-17

(2017年6月30日受付、2017年9月14日受理)

抄録: 保育者の登園場面における保育意識と登園方法の関連を明らかにすることを目的に、登園場面の保育意識尺度の検討と保育者が応じている登園方法の実態調査をした。登園場面の保育意識を因子分析した結果「関係づくり」「遊びへの移行」「保育態度の課題受容」の3因子が抽出された。登園方法は徒歩と自転車に依る者と、徒歩と自転車以外にも依る者に分けられた。登園場面の保育意識と登園方法及び所属園の関連を分散分析で検討し結果、登園方法と保育意識に関連が見られた。徒歩や自転車以外がある保育所では養育態度の課題を受容する意識が高く、徒歩や自転車だけの幼稚園では子どもや保護者と関係づくりを意識する傾向があることが明らかになった。徒歩や自転車以外がある幼稚園より保育所ではすべての意識が高く、保育所の登園時間の特性と徒歩や自転車以外を選ぶ保護者の特性に影響を受けた子どもとの実態との関連性が示唆された。

(別刷請求先: 山崎摂史)

キーワード: 登園場面、登園方法、保育者の専門性、保育意識、尺度

緒言

近年世界的にも保育者の専門性や保育の質が求められ(OECD, 2011)、今後の日本の保育者の専門性の研究には保育実践において用いられる暗黙知を明らかにすることが課題として示唆されている(香曾我部, 2011)。保育実践の暗黙知としての専門性は保育者の即興的な判断の中にあり、子どもが家庭から園への物理的な移動をする登園場面で現れる(秋田, 2013)と言われている。

子どもにとって登園場面とは、家庭から園へ移行する場面である。昨日降園してから子どもは家庭で様々な経験をし、それぞれの思いを抱いて園へやってくる。園での遊びや人との出会いに期待感をもちながらも、保護者と離れたくないという不安感との葛藤がそこにある。登園場面には葛藤を抱える子どもを送迎する保護者にとっても葛藤の場面である。保護者には子どもと離れることに寂しさや不安感を抱きながら子どもを預けることへの葛藤がある(権田, 2013)。保育者は子どもの葛藤に心寄せながら、家庭から園へと

気持ちを切り替えられるようにし(荒井, 1997)、さらには子どもを園に預ける保護者と保育者が会する貴重な場面と捉え、保護者にも安心感を与えるようなコミュニケーションを図りながら子育て支援をしなくてはならない場面となってくる。保育者にとって登園場面とは、子ども、保護者、保育者の3者が関わる保育の1日の中でも複雑な場面(増田・箕輪, 2013)であり専門性を発揮する場面と言える。

登園場面から保育者の専門性を明らかにする研究として、保木井ら(2014)の保育者の行為に着目した報告がある。1人の保育者の登園場面の行為をビデオ撮影し、行為の意味をTEMによって分析した。そして、保育者は複数のタスクを同時に行う「ながら行為」をしていることを明らかにしている。野口(2013)は市販の保育ビデオから1人の保育者と保護者と子どもの言葉を抽出し、保育者の言葉の意図をプロトコル分析した。そして、保育者の言葉かけには情緒的安定から子どもが自分で興味関心のある事柄を見つけられるようになるというステップがあることを明らかにしている。このように保木井ら(2014)と野口(2013)は、VTRを用いて保育者の行

動の意図を探索的に明らかにしているが、対象が1名の保育者であり、保育者の専門性としては限定的な範囲である。

複数の保育者を対象にしたのが山本・松葉(2012)であり、登園場面の保育者の考え方やねらいに着目し、保育者のグループインタビューをSCATによって分析した。結果、保育者は登園場面を子どもにとって「不安定な時間」「集中に適した時間」と捉え、子ども理解に基づく「環境構成」を行い「継続した目的意識の保持」や「遊びへの期待感」がもてるように配慮していることであった。このように、登園場面における保育者の専門性は、登園場面の行為の意図やねらい、考え方などを検討することで明らかになりつつある。

しかし、山本・松葉(2012)は、保育者の登園場面の捉え方や遊びへの移行に対する配慮は、園のシステムによって実行しやすくしていることを示唆している。園のシステムとして子どもが徒歩登園であることで、子どもが決まった時間に集まり易く保育が安定すること。さらに徒歩登園による集団活動が保育者の子ども理解が深まり細やかな配慮に繋がると言う。つまり、登園方法が異なれば、登園場面における保育者の考え方が異なってくると考えられる。

このような園システムの違いによって保育者の考え方が異なることを示した研究が他にもある。砂上ら(2009)は3園の複数名の保育者を対象に片付け場面のビデオ視聴してもらった。そして保育者の発言をプロトコル分析したところ、共通して子ども主体の片付けを目指していることが明らかになった。一方で、園によって屋外での片付けの関わり意識には違いが見られた。この違いには園庭の広さ、職員数だけでなく、自由遊び後の活動、他児や保護者の存在が目に入るかなどが要因であると示唆している。箕輪ら(2009)は、複数の幼稚園の保育者を対象に片付け尺度を用いて片づけの実態と保育者の目標意識の違いを調査した。そして園によって一斉に片付けようとする認識の違いがあることを明らかにしている。片付け場面とは、登園場面と同じく保育の中の葛藤場面であり、保育者固有の専門性を捉えられる場面である(秋田, 2013)。つまり片づけ場面で示された保育者の専門性としての意識の違いは、山本・松葉(2012)が示唆する登園方法で保育者の考え方が異なってくることと同様であり、登園場面でも専門性の違いの要因に園のシステムの違いがあると考えられる。

園のシステムの違いとして登園場面の幼稚園や保育所の違いも考えられる。保育所では早朝保育や長時間保育を実施し、子どもの登園時間は1人1人異なってくる。幼稚園においては限定された時間内で集団の登園が行われていることが示されている(宮本・中尾, 2007; 小林, 2002)。先行研究においては、対象は幼稚園に限定されていたことから、大卒の園のシステムとしての要因の検討がされていない。

本研究の目的は、保育者の保育意識が子どもの登園方法の違いによって異なるのかを検査し保育者の専門性の一要因を明らかにしようとするもので、登園場面における保育者の保育意識尺度を作成し、園のシステムである登園方法と園の種別の違いから専門性を検討した。

検討事項は以下の通りである。第1に保育者の登園場面の保育意識を明らかにする。第2に保育者が応じている登園方法を明らかにし、登園場面の保育意識の関連を検討する。第3に幼稚園と保育所など園の違いから登園場面の保育意識の関連を検討する。以上の点から、登園場面を通して保育者の専門性の一要因を示していく。

研究対象と方法

1. 調査対象者

関東圏内に勤務する幼稚園、保育所、こども園の保育者651名に質問紙を配布し、311名の回答を得た(回収率47.77%)。このうち、回答に著しい不備が認められるものを除外した302名を有効回答とした(有効回答率97.11%)。所属園別の有効回答数は、幼稚園113名、保育所166名、こども園21名であった。こども園は回答者数が少なく今後の分析に耐えられないと判断し、幼稚園と保育所の保育者279名を分析対象者とした。

回答者の性別は、女性が256名(91.8%)、男性が23名(8.2%)であった。経験数年別では、1~5年目が91名、6~10年目が66名、11~15年目が55名、16~20年目、21年以上が37名(M=11.11年、SD=8.55年)であった。

2. 調査期間及び方法

2-1) 調査期間

2015年7月~12月に実施した。

2-2) 調査方法

保育者に質問紙調査を実施した。質問紙の配布は無作為抽出によって園を決定し、郵送によって各園に配布した。その他に、研究協力を志願した保育者にも配布した。配布の際、個人や園の特定がされないよう、返信用封筒は匿名希望を可能とした。

2-3) 質問紙の構成

質問紙の項目は、①フェイスシート、②予備調査で作成した登園場面の保育意識の尺度(以降「登園保育意識尺度」と記す)とした。フェイスシートは、経験年数と所属園、担当するクラスで見られる登園方法とした。登園保育意識尺度は、登園場面で見られる子ども、保護者、保育者の行為

に対して3歳児クラスを想定した上で1点「絶対悪い」、2点「とても悪い」、3点「悪い」、4点「どちらかという悪い」、5点「どちらかという良い」、6点「良い」、7点「とても良い」、8点「絶対良い」の8件法で回答を求めた。

2-4) 質問紙作成の手続き

登園保育意識尺度を作成するため予備調査を実施し項目の検討をした。2014年4月から6月の期間で幼稚園(1園)と保育所(2園)の3歳児クラスの登園場面のフィールドノーツを作成した。対象の園は登園方法に車通園がなく、

徒歩通園(自転車を含む)の幼稚園と保育所とし、車通園がある保育所の計3園とした。それぞれの登園場面において「子ども」「保育者」「保護者」の行為を参与観察によって記録し、フィールドノーツにまとめた。フィールドノーツは保育経験15年以上の保育者3名で作成し、2名の研究者を加えた計5名で文脈ごとに切片化し、分類した内容を簡潔にまとめたものを質問項目とした。その際、すべての園で同じ行為が観察されたものを質問項目としたときに社会的望ましさ反応(登張,2007)が起こる可能性があることから除外し、最終的に76項目とした(表1)。フェイスシートに

表1. 登園保育意識尺度を作成する為の予備調査で使用した76項目

ID	項目	ID	項目
1	子どもは、保護者より先に走ってくる	39	保育者は、身支度が終わっていない子どもに、身支度を促す
2	子どもは、自分から保育者に挨拶をする	40	保育者は、生き物の世話をする
3	子どもは、いつもと違う園の環境に気づく	41	保育者は、他の子どもと遊んでいる
4	子どもは、その場にいる保育者一人一人に挨拶をして回る	42	保育者は、朝の身支度を自分でしている子どもを励ます
5	子どもは、ぬいぐるみを抱えてくる	43	保育者は、展示した子どもの制作物を子どもと一緒に見る
6	子どもは、ベビーカーに乗ってくる	44	保育者は、登園してきた子に対して、スキンシップを取りながら挨拶をする
7	子どもは、一緒に来た保護者を見送る	45	保育者は、登園してくる子を受け入れながら、入室の際に不安そうだった他児に時折声をかける
8	子どもは、園で定めている形式に則って挨拶をする	46	保育者は、登園の時間に避難訓練をする
9	子どもは、家でお手紙(絵)を書いてきたら保育者や友達に渡す	47	保育者は、入室をしない状態で遊び始めた子どもに対して、すぐに声をかけて入室を促す
10	子どもは、家を出てから園までの間で見つけてきた物がある時は保育者に見せる	48	保育者は、入室を渋っている子どもの保護者に対して、「行ってください」などと声をかける
11	子どもは、嬉しかった出来事があつたら保育者に話す	49	保育者は、入室を渋っている子に対して、説得する
12	子どもは、今日の活動が何かを保育者に尋ねる	50	保育者は、入室を渋っている子に対して、抱いて入室する
13	子どもは、他児の様子を窺う	51	保育者は、入室を渋る子どもに対して、手を繋いで入室する
14	子どもは、朝ごはんを食べながらくる	52	保育者は、保護者からアンケートなどの提出物を直接集める
15	子どもは、入室する前に、生き物に興味を示す	53	保育者は、保護者と世間話をする
16	子どもは、入室する前に手を消毒する	54	保育者は、保護者に対して「いってらっしゃい」と応える
17	子どもは、保護者から離れて、すぐに保育者を求める	55	保育者は、保護者に対して「お預かりします」と応える
18	子どもは、保護者に抱かれて寝たままくる	56	保育者は、保護者の健康状態を聞く
19	子どもは、毎日同じ時間にくる	57	保育者は、保護者の装いについて声をかける
20	子どもは、友達と挨拶を交わす	58	保育者は、保護者会など保護者が園を訪れる日は、当日保護者に再伝達する
21	子どもは、友達の保護者に挨拶をする	59	保育者は、本日の活動について子どもが話してきたら、準備しているものを見せる
22	保育者は、いつもと違う人が付き添ってきたときには、いつもの人はどうしたのか尋ねる	60	保育者は、本日の活動に使うものを見えるように置いておく
23	保育者は、一人一人の子どもに挨拶をしに行く	61	保護者が、提出物を出す
24	保育者は、一人一人の保護者から、子どもの朝の健康状態を尋ねる	62	保護者は、お迎えの変更等連絡事項を直接保育者に伝える
25	保育者は、一人一人の保護者から連絡事項の有無を尋ねる	63	保護者は、なかなか離れない子どもを説得する
26	保育者は、昨日、降園した後の出来事を子どもに尋ねる	64	保護者は、挨拶をしない子どもを叱る
27	保育者は、昨日病欠だった子どもに今朝の具合はどうか尋ねる	65	保護者は、掲示物を見る
28	保育者は、昨日病欠だった子どもの保護者に今朝の具合はどうか尋ねる	66	保護者は、携帯で電話しながら子どもを連れてくる
29	保育者は、子どもが家を出てから園までの間で、見つけてきた物を飾る	67	保護者は、子どもから入室するのを待つ
30	保育者は、子どもが家を出てから園までの間で、見つけてきた物を他児に見せる	68	保護者は、子どもが挨拶をするよう促す
31	保育者は、子どもが気付いた園庭の様子を一緒に見る	69	保護者は、子どもが泣いている状態のまま保育者に預け、立ち去る
32	保育者は、子どもの身体に傷があつたら保護者に尋ねる	70	保護者は、子どもが自分で行える身支度をする
33	保育者は、子どもの身体に傷の有無を入念に確認する	71	保護者は、子どもが自分で持てる荷物を持ってくる
34	保育者は、子どもの肌に触れる	72	保護者は、子どもと手をつないで来る
35	保育者は、子どもの服装について声をかける	73	保護者は、子どもについて気になることを保育者に尋ねる
36	保育者は、子どもを連れてきた一人一人の保護者に挨拶をする	74	保護者は、子どもの体調を直接、保育者に伝える
37	保育者は、上履きを忘れた子どもに上履きを貸す	75	保護者は、出会った保育者全員に挨拶をする
38	保育者は、身支度が終わった子どもに対して、スキンシップを取りながら褒める	76	保護者は、他の保護者と世間話をする

は、現在の所属園、経験年数、担当の年齢、園で見られる登園方法とした。次に今まで経験した所属園と数、経験年数、担当の年齢、登園方法とした。

フィールドノーツから抽出した項目の妥当性を検討するため、2014年7月～12月の期間で幼稚園、保育所、こども園の保育者(182名)に対して質問紙調査をした。質問内容は3歳児クラスを想定した上で76項目について回答を求めた。回答方法は織田(1970)、竹谷ら(1992)の現実の程度表現用語を基に1点「絶対悪い」、2点「とても悪い」、3点「悪い」、4点「どちらかという悪い」、5点「どちらかという良い」、6点「良い」、7点「とても良い」、8点「絶対良い」の8件法とした。各項目の得点平均と標準偏差から天井効果とフロア効果が生じた17項目を除外し、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を実施した。その際、因子負荷量が0.40未満のものを除外した。結果、20項目で構成された5因子が抽出された。5因子は「園生活への移行援助」「保護者の養育態度の理解」「子どもとの関係づくり」「保護者との関係づくり」「期待感の提供」と解釈できる内容であった。登園場面の保育者の目的としてスムーズな園生活への移行(山本・松葉, 2012)や保護者との関係づくり(増田・箕輪, 2013)が含まれることから20項目は妥当と判断した。予備調査の結果から本調査では20項目以外に必要と思われる10項目を追加し、最終的に30項目とした。

2-5) 統計処理

対象者の登園保育意識尺度の得点を所属園及び園で見られる登園方法別にt検定と分散分析にて比較検討を行った。統計処理にはIBM SPSS Statistics Ver.20を用いた。

結果

1. 担当クラスで見られる登園方法

登園方法による保育者の意識の違いを検討するため、子どもの登園方法の組み合わせと、その割合を算出し保育者は実際どのような登園方法の下で保育を実践しているのかを検討した。

表2は、現在保育者が担当しているクラスで見られる登園方法の組み合わせと回答者数を示したものである。登園方法には、徒歩、自転車、車、園バス、その他の5つがあり、組み合わせは14種類であった。なお、「その他」にはタクシー、バイクが含まれていた。

登園方法の組み合わせとして最も多かったのは「徒歩・自転車・車」の105名(37.63%)であった。次に多かったのは「徒歩・自転車」の90名(32.26%)であった。登園方法が

表2. 登園方法の組み合わせ別による回答者数と割合
(N = 279)

登園方法	N	%
徒歩・自転車・車	105	37.63
徒歩・自転車	90	32.26
徒歩	17	6.09
徒歩・車・園バス	15	5.38
徒歩・自転車・車・その他	13	4.66
徒歩・自転車・車・園バス	11	3.94
車	8	2.87
車・園バス	4	1.43
徒歩・園バス	4	1.43
徒歩・自転車・園バス	4	1.43
自転車	3	1.08
園バス	2	0.72
徒歩・自転車・その他	2	0.72
自転車・車・その他	1	0.36

「徒歩」のみは17名(6.09%)で1割に満たない結果であった。半数以上の園では徒歩通園以外にも自転車が使用され、他には車が使用されていることが明らかになった。自転車登園を行っている子どもは、雨天の場合徒歩で登園すると考えられる(河端, 2010)ことから、自転車と徒歩は同一として解釈できる。山本・松葉(2012)によると登園方法が徒歩であることで保育者の配慮を実行しやすいていることを示唆していることから、今後の分析には徒歩か自転車だけで構成された「徒歩・自転車」群と、車や園バスが含まれる「それ以外」群で比較検討していくことにした。

2. 登園保育意識尺度の構成

予備調査で作成した30項目の登園保育意識尺度の回答に偏りがないかを検討するため、項目の天井効果とフロア効果を算出した。表3は、尺度項目の得点平均と標準偏差の結果である。すべての項目において天井効果とフロア効果は認められず、回答に偏りがないことが確認された。

表4は、登園保育意識尺度の30項目について因子分析をした結果である。スクリープロットの減衰状態から3因子が妥当と判断し、主因子法プロマックス回転による因子分析を実施した。その際、因子負荷量が0.30未満の項目と、因子負荷量が複数の因子において0.30以上のものを削除した。最終的に22項目が抽出された。

第1因子に含まれる項目には「保育者は、身支度が終わった子どもに対して、スキンシップを取りながら褒める」

表3. 因子項目の平均と標準偏差の結果 (N = 279)

質問項目	M	SD
保育者は、登園してきた子に対して、スキンシップを取りながら挨拶をする	5.38	1.32
保育者は、一人一人の保護者から、子どもの朝の健康状態を尋ねる	5.33	1.51
保育者は、入室を渋っている子に対して、説得する	4.55	1.27
子どもは、ベビーカーに乗ってくる	3.08	1.66
保育者は、本日の活動に使うものを見えるように置いておく	4.60	1.30
保育者は、身支度が終わった子どもに対して、スキンシップを取りながら褒める	5.26	1.17
保育者は、一人一人の保護者から連絡事項の有無を尋ねる	4.67	1.59
保護者は、なかなか離れない子どもを説得する	4.33	1.29
子どもは、ぬいぐるみを抱えてくる	3.01	1.41
保育者は、本日の活動について子どもが話してきたら、準備しているものを見せる	4.74	1.19
保育者は、子どもの肌に触れる	4.82	1.46
保育者は、保護者会など保護者が園に訪れる日は、当日保護者に再伝達する	5.02	1.46
子どもは、家を出てから園までの間で見つけてきた物がある時は保育者に見せる	4.82	1.34
保護者は、子どもが自分で持てる荷物を持ってくる	2.59	1.34
保育者は、登園してきた子と仲のいい子が既に登園してきていることを伝える	5.39	1.01
保育者は、登園してきた子どもとゆっくり対話をする	6.06	1.03
保育者は、保護者の健康状態を聞く	4.04	1.47
保育者は、入室を渋っている子に対して、抱いて入室する	4.64	1.19
保育者は、上履きを忘れた子どもに上履きを貸す	5.21	1.21
子どもは、登園してきた子を遊びに誘う	6.17	1.52
保育者は、登園してきた子どもを抱きあげる	5.37	1.46
保育者は、保護者に子どもの家庭での様子を聞く	6.06	1.14
子どもは、家でお手紙(絵)を書いてきたら保育者や友達に渡す	4.40	1.35
子どもは、晴れている日でも長靴を履いてくる	3.77	1.17
保育者は、登園してきた子が今日の当番であることを伝える	5.37	1.17
保育者は、展示した子どもの制作物を子どもと一緒に見る	5.35	1.19
子どもは、毎日決まった保護者と登園してくる	5.76	0.95
子どもは、保護者から離れて、すぐに保育者を求める	4.41	1.34
子どもは、口に物を入れてやってくる	2.55	1.00
保育者は、行事で使う音楽をながしておく	5.21	1.21

「保育者は、登園してきた子どもとゆっくり対話をする」「保育者は、保護者会など保護者が園に訪れる日は、当日保護者に再伝達する」など保育者が子どもと保護者と関係をつくらうとする保育意識だと判断し「関係づくり」と命名した。第2因子に含まれる項目には「子どもは、毎日決まった保護者と登園してくる」「保育者は、行事で使う音楽をながしておく」「子どもは、登園してきた子を遊びに誘う」など保育者が母子分離から遊びへの移行を援助する保育意識だと判断し「遊びへの移行」と命名した。第3因子に含まれ

る項目には「子どもは、ベビーカーに乗ってくる」「子どもは、口に物を入れてやってくる」「子どもは、ぬいぐるみを抱えてくる」「保護者は、子どもが自分で持てる荷物を持ってくる」など保育者が子どもの姿から保護者の養育態度の課題を把握し受け入れる保育意識だと判断し「養育態度の課題受容」と命名した。因子の信頼性についてChronbachの α 係数を算出し内的整合性を検討したところ、第1因子は0.76、第2因子は0.74、第3因子は0.72で、すべて0.70以上であり内的一貫性が得られた。

表4. 登園保育意識尺度の30項目における因子分析の結果 (α 係数)

項目	因子負荷量		
	1	2	3
第1因子「関係づくり」($\alpha = 0.79$)			
保育者は、身支度が終わった子どもに対して、スキンシップを取りながら褒める	.722	-.042	-.023
保育者は、登園してきた子どもとゆっくり対話をする	.692	-.016	.012
保育者は、保護者会など保護者が園に訪れる日は、当日保護者に再伝達する	.615	-.057	.133
保育者は、登園してきた子に対して、スキンシップを取りながら挨拶をする	.547	.139	-.220
保育者は、子どもの肌に触れる	.519	.009	-.064
保育者は、一人一人の保護者から、子どもの朝の健康状態を尋ねる	.498	.023	.186
保育者は、本日の活動について子どもが話してきたら、準備しているものを見せる	.475	.056	-.046
子どもは、家を出てから園までの間で見つけてきた物がある時は保育者に見せる	.420	.115	.054
保育者は、登園してきた子と仲のいい子が既に登園していることを伝える	.312	-.041	.024
第2因子「遊びへの移行」($\alpha = 0.74$)			
子どもは、毎日決まった保護者と登園してくる	.043	.674	-.066
保育者は、行事で使う音楽をながしておく	-.205	.622	-.139
子どもは、登園してきた子を遊びに誘う	.101	.550	-.044
子どもは、家でお手紙(絵)を書いてきたら保育者や友達に渡す	.193	.545	-.016
保育者は、登園してきた子が今日の当番であることを伝える	.076	.481	.109
子どもは、保護者から離れて、すぐに保育者を求める	.155	.461	-.007
子どもは、晴れている日でも長靴を履いてくる	-.108	.381	.193
第3因子「養育態度の課題受容」($\alpha = 0.72$)			
子どもは、ベビーカーに乗ってくる	.025	.162	.700
子どもは、口に物を入れてやってくる	-.286	.192	.620
子どもは、ぬいぐるみを抱えてくる	.198	.011	.615
保護者は、子どもが自分で持てる荷物を持ってくる	.038	-.152	.560
保護者は、なかなか離れない子どもを説得する	.209	-.205	.446
保育者は、入室を渋っている子に対して、説得する	-.133	-.054	.392
因子相関行列	1	-	.411
	2	-	.118
	3	-	-

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

3. 登園保育意識と所属園の差異

所属園による登園保育意識の差異を検討するため、幼稚園と保育所の得点について両側検定のt検定を行った(表5)。「関係づくり」において幼稚園より保育所が有意に高いことが認められた($t(277) = -4.28, p < 0.001$)。「遊びへの移行」においては、幼稚園よりも保育所が有意に高い傾向が認められた($t(277) = -1.94, p < 0.1$)。「養育態度の課題受容」では、幼稚園より保育所が有意に高いことが認められた($t(274.87) = -10.05, p < 0.001$)。すべての項目において、幼稚園より保育所が高い傾向にあった。つまり、登園場面において幼稚園より保育所が保育意識は高いと言える。

表5. 所属園による登園保育意識尺度のt検定の結果

	N	幼稚園	保育所	t値
		113	166	
関係づくり	M	4.72	5.23	-4.28***
	(SD)	(0.92)	(1.02)	
遊びへの移行	M	4.21	4.47	-1.94 †
	(SD)	(1.18)	(1.04)	
養育態度の課題受容	M	2.84	3.76	-10.05***
	(SD)	(0.65)	(0.88)	

*** $p < 0.001$ † $p < 0.1$

表6. 登園方法による登園保育意識尺度のt検定の結果

		徒歩・ 自転車	それ以外 (車・園バス)	t 値
	N	110	169	
関係づくり	M	4.96	5.07	0.87ns
	(SD)	(0.95)	(1.05)	
遊びへの移行	M	4.30	4.40	0.8ns
	(SD)	(1.16)	(1.07)	
養育態度の 課題受容	M	3.16	3.53	3.45***
	(SD)	(0.86)	(0.92)	

*** $p<0.001$

4. 登園保育意識と登園方法の差異

登園方法による登園保育意識の差異を検討するため、徒歩と自転車で構成された「徒歩・自転車」群と、車や園バスが含まれる「それ以外」群の得点について両側検定のt検定を行った(表6)。「関係づくり」と「遊びへの移行」において有意差は認められなかった(関係づくり($t(277)=0.87$, ns); 遊びへの移行($t(277)=0.8$, ns))。「養育態度の課題受容」においては「徒歩・自転車」よりも「それ以外」が有意に高いことが認められた(両側検定: $t(277)=3.45$, $p<0.001$)。つまり、養育態度の課題受容において「徒歩・自転車」群よりも「それ以外」群が養育態度を受容する意識が高いと言える。

5. 所属園と登園方法における登園保育意識の関連

所属園と登園方法による登園保育意識の差異を検討するため、所属園と登園方法の2要因の分散分析を行った。図1、図2、図3は、所属園と登園方法による登園保育意識尺度の分散分析と交互作用の結果である。

「関係づくり」において有意な傾向のある交互作用($F(1,275)=3.21$, $p<0.1$)と、所属園で主効果($F(1,275)=16.02$, $p<0.001$)が認められ、登園方法によって所属園の効果が異なるという結果となった。

そこで単純主効果の検定を行ったところ登園方法の「それ以外」において、幼稚園よりも保育所の得点が有意に高かった($F(1,275)=19.06$, $p<0.001$)。つまり、登園方法に車や園バスがあると、幼稚園より保育所で子どもや保護者との関係づくりをする意識が高いと言える。所属園の「幼稚園」においては、「それ以外」の者よりも「徒歩・自転車」の者の得点が有意に高い傾向にあった($F(1,275)=3.08$, $p<0.1$)。つまり、幼稚園において、徒歩や自転車の登園方法であることが、子どもや保護者と関係づくりをする意識が高い傾向にあると言える(図1)。

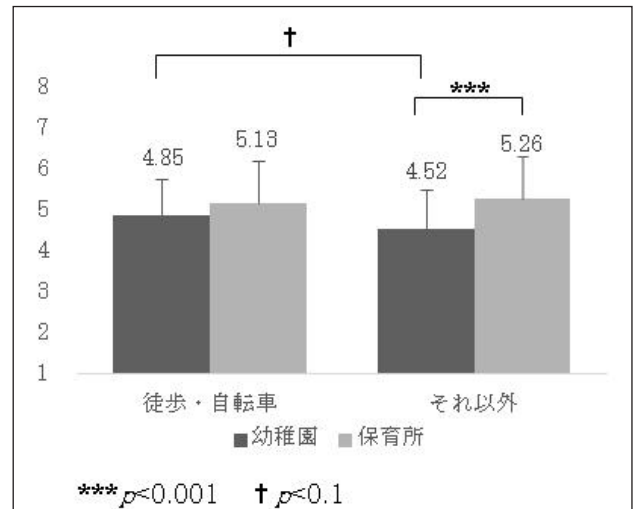


図1. 「関係づくり」における所属園と登園方法の単純主効果の結果

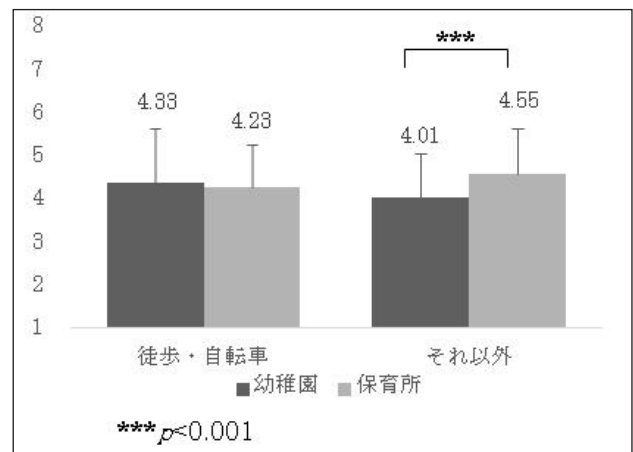


図2. 「遊びへの移行」における所属園と登園方法の単純主効果の結果

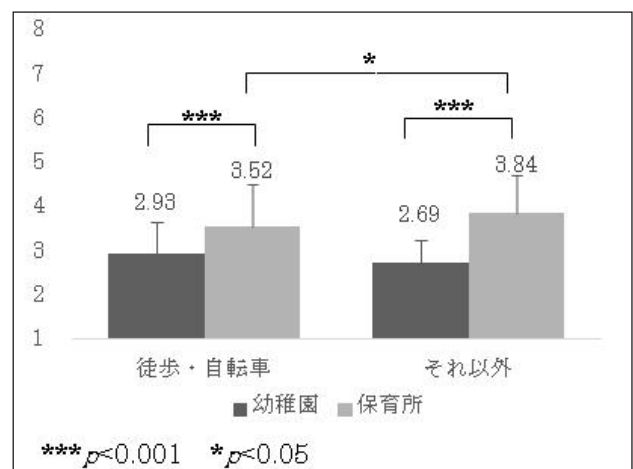


図3. 「養育態度の課題受容」における所属園と登園方法の単純主効果の結果

「遊びへの移行」においては有意な交互作用 ($F(1,275)=4.87, p<0.05$) が認められたが、主効果では有意差は認められなかった。そこで単純主効果の検定を行ったところ登園方法の「それ以外」において、「幼稚園」よりも「保育所」の得点が有意に高かった ($F(1,275)=7.83, p<0.01$)。つまり、登園方法に車や園バスがあると、幼稚園より保育所で遊びへの移行を援助する意識が高いと言える (図2)。

「養育態度の課題受容」においては有意な交互作用 ($F(1,275)=7.23, p<0.01$) と、所属園で主効果 ($F(1,275)=70.55, p<0.001$) が認められ、登園方法によって所属園の効果が異なるという結果となった。そこで単純主効果の検定を行ったところ登園方法の「それ以外」において、「幼稚園」よりも「保育所」の得点が有意に高かった ($F(1,275)=69.81, p<0.001$)。また、「徒歩・自転車」においても、「幼稚園」よりも「保育所」の得点が有意に高かった ($F(1,275)=14.57, p<0.001$)。所属園の「保育所」においては、「徒歩・自転車」よりも「それ以外」の得点が有意に高かった ($F(1,275)=5.16, p<0.05$)。つまり、登園方法に関係なく、幼稚園より保育所が保護者の養育態度の課題を受容することを強く意識していると言える。しかし、保育所においては徒歩や自転車の登園方法よりも、車や園バスを使用する実態があることで保護者の養育態度の課題を受容する意識が高いと言える (図3)。

考察

1. 登園方法の種類の実態

保育者が実際に経験している子どもの登園方法を検討したところ、子どもの登園方法には徒歩、自転車、車、園バス、その他のタクシーやバイクを含む5種類であった。そして5種類は14の組み合わせがあり、「徒歩・自転車・車」「徒歩・自転車」がそれぞれ3割以上を占めていることが明らかになった。また「徒歩」だけの園は1割以下で稀なケースであることが明らかになった。宮澤 (1998) の調査によると登園方法として徒歩、自転車、車、バイクの利用だけであったが、本調査では園バスとその他タクシーの利用者がいることが示された。この結果の違いには先行研究の調査範囲が一部地域の保育所に限定され、対象が保護者であったことで違いが生じたと考えられる。タクシーやバイクを設置主体や運営主体が日常使用する登園方法として制定しているとは安全性を担保する上でも考えづらく、保護者は補助的な登園方法として利用していると考えられる。保護者に回答を求めた場合、補助的なタクシーは回答せず設置主体や運営主体が制定している登園方法を回答したものと考えられる。しかし、本研究は保育者に回答を求めたことで、

保育者が日常的に目にする登園方法の実態を回答したものと考えられる。

多くの保育者が日々対応している登園方法は、徒歩と自転車、車やバスの登園方法が主であり、複数種類の登園方法を用いた子どもや保護者、または設置主体や運営主体が定めたもの以外の方法にも応じて保育を組み立てていると言える。

2. 登園保育意識と所属園の関連

所属園による登園保育意識の差異を検討するため、幼稚園と保育所の得点について両側検定のt検定を行ったところ、「関係づくり」「遊びへの移行」「養育態度の課題受容」のすべての保育者の登園保育意識で幼稚園より保育所に所属している保育者の意識が高い傾向にあることが明らかになった。この結果には幼稚園と保育所の登園場面の時間の違いがあると考えられる。幼稚園と保育所では1日の流れが異なり、幼稚園は登園時間を指定することができることから、保育の流れを考えた一定時間内を登園時間としている (小林, 2002; 宮本・中尾, 2007)。山本・松葉 (2012) が述べる一定の時間内に登園が行われることから保育が安定した状況が幼稚園には整えられていると言える。つまり幼稚園の保育者はスムーズな受け入れに繋がる環境構成や計画的な配慮を可能とする状況にある。一方で保育所は早朝保育から順次登園をする為に時間が限定できず、保育者は保育が不安定な状況で1人1人の子どもと保護者の状況を判断して対応することが求められる。その為保育所の保育者は保育のルーチンに沿った細かい計画的な配慮や援助よりも、広い可能性を意識した個別の状態を想定し、その場で応じられる意図的な行為を常に強く意識する必要が出てくる。このような園としての大きなシステムの違いにより幼稚園より保育所に所属する保育者はすべての登園場面で意識が高いと考えられる。

園としてのシステム以外にも幼稚園と保育所の保護者の違いが挙げられる。幼稚園の保護者は子どもの登園時間に合わせた生活時間の調整をし、子どもが安定した生活を送れるように努めている (藤崎, 2010)。保育所の子どもは幼稚園に比べ朝食欠食や睡眠不足が多く、保護者の生活リズムが影響していることが言われている (木林ら, 2009)。登園場面で見られる子どもの違いとして、水野ら (2017) によると登園場面では幼稚園よりも保育所の子どもの泣く姿が継続的に続くことが報告されている。つまり幼稚園と保育所の園としてのシステムの違いもあるが、保育所は子どもが抱える家庭背景と子どもの実態が幼稚園と異なり、より複雑な状況に応じた専門性が必要となってくるのではないだろうか。

3. 登園保育意識と登園方法の関連

登園方法による登園保育意識の差異を検討するため、徒歩や自転車で構成された「徒歩・自転車」群と、車や園バスが含まれる「それ以外」群の得点について両側検定のt検定を行ったところ、「養育態度の課題受容」で「徒歩・自転車」より「それ以外」を利用する子どもがいる保育者の保育意識が高いことが明らかになった。「養育態度の課題受容」とは、子どもの実態から保護者の養育態度を推測し保護者の課題を受容する意識である。「養育態度の課題受容」においては、登園方法に関わらず意識得点はメジアン¹の4.5より低かった。つまり登園方法に関係なくどの保育者も課題を受容しない意識が現れていると言える。しかし容認しないまでも徒歩や自転車登園以外の登園方法であることで保育者は養育態度の課題を容認する傾向にある。この結果は登園時間に保護者が一堂に会するか否かの違いがあると考えられる。徒歩や自転車は登園時間が限定されている(山本・松葉, 2012)。徒歩や自転車登園は時間が限定されることで送迎する保護者が一堂に会することになる。複数の保護者がいる状況下で保育者が一部の保護者の養育態度の課題を受容すると、他の保護者にも望ましくない養育態度が波及する恐れがある。保育者はどの保護者に対しても平等な関わりをする姿勢をもち意思を示していく必要が出てくる。つまり徒歩か自転車登園に限られることで保育者は養育態度に対する一定の基準を設けながら課題を容認しない構えをとる意識があると考えられる。一方で車や園バスでは保護者の養育態度の課題を受容しなければならない背景が考えられる。保護者と顔を合わせる事が少ない通園バスでは養育態度の課題意識が低くなり容認する傾向にあると言えるだろう。さらに園バスや車やバイクなどの登園方法を利用する保護者の理由として、親が自営業であること(宮澤, 1998)、親が通勤の利便性を優先していることがあり(福田, 2000)、子どもは時間に追われ慌ただしく身支度をして登園している背景がある(久世・竹川, 1995)。保育者は養育態度の課題を容認し難くはあるが、目の前の子どもと保護者の状況を受容しなくてはならない現状と、保護者同士が顔を合わせづらい課題の受容を可能とする状況が重なり保育者の意識を受容へと向かわせていると考えられる。

4. 所属園と登園方法における登園保育意識の関連

所属園と登園方法による登園保育意識の差異を検討するため2要因の分散分析を実施したところ、「関係づくり」においては交互作用が認められ、幼稚園で「それ以外」よりも「徒歩・自転車」の者の有意が高い傾向にあった。この結果は山本・松葉(2012)で示唆した幼稚園の徒歩通園に

よる登園場面の捉え方の違いが現れたものと考えられる。幼稚園の徒歩登園の園は保木井ら(2014)の「ながら行為」として示されたように、子どもと保護者が集う時間で集団に対して同時並行的に意図的な行為が常に求められる。つまり限られた時間の中で関係を築くための行為が意識を高めていると考えられる。一方で通園バスや車では保護者と関わる時間が物理的に少なく直接話ができないことから連絡帳が活用されている(風間・丸山, 1988)。つまり毎朝保護者と対面する徒歩登園の保育者にとって、登園場面を保護者との関係づくりの場として捉える側面があると考えられる。

保育所において「養育態度の課題受容」で「徒歩・自転車」よりも「それ以外」が有意に高かった。保育所における徒歩や自転車以外の登園場面として、保育所特有の早朝保育や保護者の生活に合わせた時間による1人1人が異なる時間で登園する。また上述したように車やバイク、園バスを利用する子どもの特徴として、子どもは保護者の生活に合わせた生活になり、家での身支度から慌ただしい時間を過ごしていることがある。保育所の保育時間と徒歩や自転車以外の両特性が合わさることで、保育者は課題解決しがたい子どもの生活背景を捉えながら他の保護者の目を意識することなく個別に応じることになる。その為、養育態度の課題を受容する意識を高めると考えられる。

すべての登園場面の意識において「それ以外」で幼稚園よりも保育所の保育者の意識が高いことが認められたことも同義的状況が考えられる。特に保育所における徒歩や自転車以外の保育者の意識の高さは養護を基盤とした保育の表れだと言えるだろう。保育所で徒歩や自転車以外に応じる保育者の状況として、保育所特有の登園時間が一人ひとり異なることで個人に応じた援助を可能としながらも、保護者の生活リズムに影響された不安定な状態で登園してくる子どもがいる現実を感じ、保護者の生活状況を受け入れなくてはならないものと考えられる。基本的な登園場面での保育者の関わりのステップとして子どもの情緒の安定から興味関心のある事柄を見つけられるようにすることがある(野口, 2013)。保育所の保育者は、まず直接保護者と対面し登園場面の子どもから家庭背景の課題を感じとる。そして保護者に対しては養育態度の課題改善に向けた関係づくりを行い、子どもには情緒の安定を図る関係づくりと子どもが興味関心を示せる遊びへの移行を援助するステップを踏むのではないだろうか。このステップを確実に踏むが故に、保育所の徒歩や自転車以外の登園方法によって登園場面における意識を引き上げていると言えるだろう。

結論

本研究は登園場面における保育者の専門性に着目し、園のシステムの違いである登園方法と所属園の違いから保育者の保育の意識の違いを検討してきた。その結果、複種類の登園方法があることが明らかになり、登園方法と幼稚園と保育所の違いによる保育者の保育の意識の違いが確認できた。

保育者が応じる登園方法は徒歩と自転車の利用と、徒歩と自転車に加え車や園バスなどの利用であり、単種類だけに応じている保育者は稀であることが明らかになった。この登園方法を基に徒歩や自転車だけに応じている保育者と、車や園バスにも応じている保育者に分け、さらに登園場面の意識尺度を作成し、幼稚園と保育所の保育者において登園場面における「関係づくり」「遊びへの移行」「養育態度の課題受容」の意識から専門性の違いを検討した。

登園場面の保育者の保育意識には幼稚園と保育所の違いが関係していた。保育所の保育者の意識が高く、保育所特有の1人1人が異なる登園時間における個別対応と保護者の生活リズムの影響を受けた子どもに対する保育意識の表れだと示唆された。

登園場面の保育者の養育態度の課題受容の意識には、登園方法が関係していた。徒歩や自転車以外の利用がある保育者の意識が高く、車や園バスでは保護者と顔を合わせる機会が少ないだけでなく、車や園バスを利用する子どもの家庭背景を受容しなくてはならない意識の表れだと示唆された。

保育者の保育意識は所属園と登園方法で異なる関係があった。幼稚園では徒歩や自転車以外の利用よりも、徒歩や自転車の利用がある保育者の関係づくりの意識が若干高く、徒歩や自転車を利用する保護者と毎朝対面することで登園場面を関係づくりの場面と捉えていることが示唆された。保育所では徒歩や自転車の利用よりもそれ以外の利用がある保育者の養育態度の課題受容が高く、保育所特有の1人1人異なる登園時間で対応する個別の関わりと、車や園バスを利用する子どもの家庭背景が合わさり、保育者の養育態度の課題を受容しようとする意識の表れだと示唆された。

保育者の専門性は登園場面において、山本・松葉(2012)が示唆した園のシステムによって異なってくるということが明らかになったと言える。この保育者の専門性の違いは片づけ場面と同意義とも言えるだろう(箕輪ら, 2009)。今後保育者の専門性を明らかにする為には、保育者のおかれている環境の違いを含めて検討し、保育環境と保育者の専門性の関係を探る必要があるだろう。

最後に、本論では園のシステムの違いと保育者の保育意識の関係を仮説に検討したが、保育者の専門性には登園時間や登園方法との関係だけでなく、登園方法を選択した保護者やその子どもの実態による保育者の専門性の関係が示唆された。今後早朝から夜間までの長時間保育が広がり複雑化する登園場面が予想される。様々な子どもと保護者の実態に応じた保育者の関わり方を検討していくことで専門性としての行為を明らかにする必要がある。

文献

- 秋田喜代美(2013): 第1章本研究の問題と目的. 野間教育研究所紀要 **52**, 10-23.
- 荒井恭子(1997): 登園時、降園時大切したいこと. 教育じほう(東京都立教育研究所) **591**, 34-37.
- 藤崎春代(2010): 幼稚園3歳クラス入園児の園生活への適応過程と保護者の援助 生活時間の調整に注目して. 日本発達心理学会第21回大会発表論文集, p382.
- 福田幸子(2000): 子どもの豊かな育ちをねがって. 保育実践研究 **1**, 33-39.
- 権田あずさ(2013): 母親の対児行動と子どもの対人行動との関連. 幼稚園登園場面の縦断的観察を通して. 広島大学博士論文.
- 保木井啓史・智谷思音・中坪史典(2014): 「ながら行為」としての保育者の専門性に関する研究: 登園時から設定保育に至るまで. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 教育人間科学関連領域 **63**, 111-120.
- 河端瑞貴(2010): 保育所アクセシビリティ 東京都文京区の事例研究. 応用地域学研究 **15**, 1-12.
- 風間佳子・丸山良平(1988): 幼稚園と家庭との連携効果の検討その2: 実証的な分析方法の試み. 日本保育学会大会第41回大会研究論文集, pp60-61.
- 木林悦子・上野恭裕・西谷香苗(2009): 幼稚園・保育所における園児の食・生活習慣についての比較研究. 園田学園女子大学論文集 **43**, 85-101.
- 小林洋文(2002): 幼稚園教諭養成における付属幼稚園の存在意義 長野県短期大学付属幼稚園の場合. 長野県短期大学紀要 **57**, 1-15.
- 香曾我部 琢(2011): 保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 **59**, 53-68.
- 久世妙子・竹川雅子(1995): 3歳児保育における幼稚園と家庭の連携の在り方を考える 10年間の連絡ノートの分析を中心に. 愛知教育大学教科教育センター研究報告 **19**, 51-60.

- 増田時枝・箕輪潤子 (2013)：第2章 テキスト「保育内容言葉」にみる登園場面の言葉かけ. 野間教育研究所紀要 **52**, 26-50.
- 箕輪潤子・秋田喜代美・安見克夫ら (2009)：幼稚園における片づけの実態と目標の関連性の検討. 乳幼児教育研究 **18**, 41-50.
- 宮本文人・中尾友子 (2007)：幼稚園における園児の生活習慣行動と生活支援空間. 日本建築学会計画系論文集 **611**, 45-51.
- 宮澤 仁 (1998)：東京都中野区における保育所へのアクセス可能性に関する時空間制約の分析. 地理学評論 **A71**, 859-886.
- 水野政夫・山崎摂史・金子亜美 (2017)：登園場面で泣く幼児の実態と保育者の意識. 日本保育学会 第70回大会論文集, p1162.
- 野口隆子 (2013)：第3章 研修用ビデオにみる登園場面の言葉かけ. 野間教育研究所紀要 **52**, 51-71.
- 織田揮準 (1970)：日本語の程度量表現用語に関する研究. 教育心理学研究 **18**, 166-176.
- OECD (2011)：OECD保育白書・人生の始まりこそ力強く乳幼児期の教育とケア (OECD)の国際比較. 星美和子・首藤美香子・大和洋子ら (訳), 明石書店, 東京.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝ら (2009)：保育者の語りにみる実践知:「片づけ場面」の映像に対する語りの内容分析. 保育学研究 **47**, 174-185.
- 竹谷誠・中村直人・松居辰則 (1992)：アンケート調査のための程度量表現用語の意味構造分析. 電子情報通信学会論文誌A基礎・境界 **75**, 399-406.
- 登張真稲 (2007)：社会的望ましさを尺度を用いた社会的望ましさを修正法 その妥当性と有効性. パーソナルティ研究 **15**, 228-239.
- 山本聡子・松葉百香 (2012)：子どもの登園における保育者の配慮に関する研究. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究紀要 **18**, 97-108.

An Examination of the Relationships between the Method of Going to a Childcare Facility and Childcare Awareness in That Setting

Setsufumi YAMAZAKI^{*1}, Tsugumi KANEKO^{*2}, Masao MIZUNO^{*3} and Harumi NAKAYAMA^{*4}

^{*1} School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

^{*2} Japan Child Welfare College,
1-4-8 Hanazono, Chuo-ku, Niigata-city, Niigata 950-0086, Japan

^{*3} Koutouku Onagigawa Nursery School,
1-3-30 Kitasuna, Koutou-ku, Tokyo 136-0073, Japan

^{*4} Minamisenju daisan Kindergarten,
1-13-17 Minamisenju, Arakawa-ku, Tokyo 116-0003, Japan

Abstract : With the objective of clarifying relationships between childcare awareness of childcare providers and the method of going to the childcare facility, we examined the scale of childcare awareness in that setting and surveyed the actual conditions of the method of going to the childcare facility to which the childcare providers responded. Factor analysis of childcare awareness in the setting of going to the childcare facility resulted in extraction of three factors: "creating relationships", "transitioning to play" and "accepting the issues of a childcare attitude". Responses from childcare providers about the method used to go to the childcare facility were divided into those who walked or rode bicycles and those who used a method other than walking or riding bicycles. Relationships between childcare awareness in the setting of going to the childcare facility, the method used to go to the childcare facility and the affiliated facility were examined by analysis of variance, and as a result, relationships were found between the method of going to the childcare facility and childcare awareness. At nursery schools where methods other than walking or riding bicycles were used, we found there was a high level of awareness about accepting the issues involved in a childcare attitude, while at kindergartens that were reached only by walking or riding bicycles, there was a clear tendency to be aware of relationships with children and their guardians. The levels of awareness were all higher at nursery schools than at kindergartens that were reached by a method other than walking or riding a bicycle. Our findings also suggested the relevance of the characteristics of the time taken to go to nursery schools and the characteristics of guardians who chose a method other than walking or riding a bicycle upon the actual conditions of the children affected by these circumstances.

(Reprint request should be sent to Setsufumi Yamazaki)

Key words : Setting of going to a childcare facility, Methods of going to a childcare facility, Expertise of childcare providers, Childcare awareness, Scale